池袋の怪

岡本綺堂

安政の大地震の翌（あく）る年の事で、麻布の某藩邸に一種の不思議が起った。即ち麻布六本木に西国某藩の上屋敷があって、ここに先殿（せんとの）のお部屋様が隠居所として住って居られたが、幾年来別に変った事もなく、怪しい事もなく、邸内無事に暮していた。然（しか）るにその年の夏のはじめ、一匹の蛙（かわず）が椽（えん）から座敷へ這上って、右お部屋様の寝間の蚊帳（かちょう）の上にヒラリと飛び上ったので、取あえず侍女（こしもと）共を呼んでその蛙を取捨てさせた所が、不思議にもその翌晩も飛び上る、その翌々晩も這上る。草深い麻布の奥、元より庭も広く、池も深く、木立も草叢も繁茂（おいしげ）っているから、夏季になれば蛇も這出そう、

蛙も飛出そう、左(さ)のみ怪しむにも及ばぬ事と、最初は誰も気にも留めずに打過ぎたが、何分にもその蛙が夜な夜な現われると云うに至っては、少しく怪しまざるを得ない。しかも日を経るに随(したが)って、蛙は一匹に止らず、二匹三匹と数増して、果(はて)は夜も昼も無数の蛙が椽に飛び上り、座敷に這込むという始末に、一同も是(こ)れ尋常事(ただごと)でないと眉を顰め、先ずその蛙の巣窟を攘(はら)うに如ずと云うので、お出入りの植木職を呼あげて、庭の植込を洗(ふ)かせ、草を苅らせ、池を浚(さら)わせた。で、それが為かあらぬか、その以来、例の蛙は一匹も姿を見せぬようになったので、先ず可(よ)しと何(いず)れも安心したが、

何ぞ測らん右の蛙がそもそも不思議の発端で、それからこの邸内に種々の怪異（あやしみ）を見る事となった。ある日の夕ぐれ、突然（だしぬけ）にドドンと凄じい音がして、俄に家がグラグラと揺れ出したので、去年の大地震に魘（おび）えている人々は、ソレ地震だと云う大騒ぎ、ところが又忽ちに鎮って何の音もない。で、それからは毎夕点燈頃（ひともしごろ）になると、何処（いずく）よりとも知らず大浪の寄せるようなゴウゴウという響（ひびき）と共に、さしもに広き邸がグラグラと動く。詰合（つめあい）の武士も怪しんで種々（いろいろ）に詮議穿索（せんぎせんさく）して見たが、更にその仔細が分らず、気の弱い女共は肝（きも）を冷して日を送っている中に、右の家鳴震動は十日ばかりで歇（や）んだ

かと思うと、今度は石が降る。この「石が降る」という事は往々聞く所だが、必らずしも雨霰の如くに小歇（おや）なくバラバラ降るのではなく何処（いずく）よりとも知らず時々にバラリバラリと三個四個（みっつよっつ）飛び落ちて霎時歇（しばらくや）み、また少しく時を経て思い出したようにバラリバラリと落ちる。けれども、不思議な事には決して人には中（あた）らぬもので、人もなく物も無く、ツマリ当り障りのない場所を択んで落ちるのが習慣（ならわし）だという。で、右の石は庭内にも落ちるが、座敷内にも落ちる、何が扨（さて）、その当時の事であるから、一同ただ驚き怪しんで只管（いたずら）に妖怪変化の所為（しわざ）と恐れ、お部屋様も遂にこの邸（やしき）に居堪（いたたま）れず、

浅草並木辺の実家へ一先(ひとまず)お引移りという始末。この事、中屋敷下屋敷へも遍(あまね)く聞え渡ったので、血気の若侍共は我れその変化の正体を見届けて、渡辺綱、阪田公時にも優る武名を轟かさんと、いずれも腕を扼(さす)って上屋敷へ詰かけ、代る代る宿直(とのい)を為(し)たが、何分にも肝腎の妖怪は形を現わさず、夜毎夜毎に石を投げるばかり。で、一同も少しく魂負けがして、念の為に石の最も多く降るという座敷にズラリと居列(いなら)んで、屹(きっ)と頭(かしら)をあげて天井を睨み詰めていると、石は一向に落ちて来ぬ。かくて半晌(はんとき)も過ぎると、何れ(いず)も漸く飽(あき)が来て、思わず頭を低(た)れると、あたかもその途端に石がバラリと落ち

るという工合で、どうしても上に物あって下の挙動を窺っているとよりは見えぬ。それには何(いず)れも持て余してどうしたらよかろうと協議の末、井神何某と云う侍が、コリャ狐狸の所為(しわざ)に相違ないから、恐嚇(おどし)に空鉄砲を撃って見るがいいと、取あえず鉄砲を持ってその場へ引返して来る、この時早し彼時遅し、忽(たちま)ちに一個(ひとつ)の切石が風を剪って飛んで来て、今や鉄砲を空に向けんとする井神の真向に礑(はた)と中(あた)ったから堪らない、眉間は裂けて鮮血(なまち)が颯(さっ)と迸(ほとばし)出る。この不意撃に一同も総立となって、井神は屈せず鉄砲を放ったが、空砲(からづつ)とは云いながら何の効目(ききめ)もなく、石はますます降るという始末

に、何(いず)れも殆ど匙を投げて、どうにもこうにも手の着様(つけよう)がない。何しろ、これまで曾(かつ)て人を傷つけたことの無いこの石が、鉄砲を持出すと直ちにその人を撲(う)つというのは如何にも奇怪で、何でも怪しの物が潜んでいるに相違ないと、更に家(や)探しに取かかって、座敷内は云うに及ばず、天井裏まで取調べたけれども、更にこれぞと云う手懸(てがかり)もなく、また庭の内には狐狸の住家らしい穴も見当らぬので、ただ不思議不思議と云い暮して日を経る中に、ある者の説に曰く、昔からの伝説(いいつたえ)に、池袋村（北豊島郡）の女を下女に雇うと、不思議にもその家に種々の怪異(あやしみ)がある。これは池袋の神が我

が氏子を他へ遣るのを厭(いと)って、かかる祟(たたり)を為(な)すのだと云う、で、今度の不思議も或はその祟ではあるまいか、念の為にこの邸の下女を調べて見たらば可(よ)かろうとの事。成ほど、そんな事があるかも知れぬと、侍女(こしもと)下女を一々取調べた所が、果してその中に池袋生れの者があったので、当人の知った事ではあるまいが、兎も角もこれに長の暇(いとま)を出して、さてどうであろうとその後の模様を窺うと、石は相変らず降る。エエ何の事だ、池袋も的(あて)にはならぬと愚痴を翻(こぼ)していると、それから二日経ち、三日経つ中に、石は次第に数が減って、五六日の後には一個も降らぬようになったのも不

思議、しかもその後には何の怪異（あやしみ）もなかったことはいよいよ不思議。で、右の怪異は全く池袋の祟と一決して、一同もホッと息を吐いたと云う。

以上は紛れもなき事実で、現在これを目撃した人の談話（はなし）をそのまま筆記したものである、しかしそれが果して池袋の祟であるや否やは勿論保証の限（かぎり）でない。今日でも北豊島に池袋村という村は存在しているが、当時は曾てそんな噂を聞かぬ。けれども、江戸時代には専らそんな説が伝えられたのは事実で、これに類似の奇談が往々ある。で、名奉行と聞えた根岸肥前守の随筆「耳袋」の中にも「池尻村とて東武の南、池上本

門寺より程近き一村あり、彼(かの)村出生の女を召仕えば果して妖怪などありしと申し伝えたり、実否を知らず」と記(しる)してある。シテ見ると、池尻の者にもそんな伝説があるか知らぬが、これは余り聞き及ばぬ事で、恐らく筆者の肥前守が池袋を池尻と聞き誤ったのではあるまいか。しかし北豊島と池上では、北と南で全然方角が違うから、或は実際別物かも知れぬ。兎にかく江戸時代には池袋の奉公人を嫌うとは不思議で、何か一家に怪しい事があれば、先ず狐狸(きつねたぬき)の所為(しわざ)といい、次には池袋と云うのが紋切形の文句であった。又一説には、単に奉公人として召仕う分には仔細ないが、万一これ

と情を通ずる者があると、それから種々の怪異を見るのだとも云う。何方（どっち）にしても、その原因や理由の解（わか）ろう筈はなく、当時ではかかる噂も全く絶えて了ったようだ。

（『文藝倶楽部』02年4月号）

＊〈日本妖怪実譚〉（記者）より。筆名は「不語堂」使用。

底本：「文藝別冊［総特集］岡本綺堂」河出書房新社
　　　２００４（平成16）年1月30日発行
初出：「文藝倶楽部」
１９０２（明治35）年４月号
入力：hongming
校正：noriko saito
２００４年７月15日作成
２００４年８月14日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。